山田正亮：10年の沈黙

私の画廊では1979年以来，毎年山田正亮展を開催しており，旧作，新作を織りまぜ今回で10回目を数える．このたびの展覧会は1970年代前期の絵画（油彩）をご覧いただくことになった．

カタログのテキストは長年にわたり山田正亮の作品を見てきておられる美術評論家の早見堯氏にお願いし，「内からと，外からの絵画」と題するエッセーをご寄稿いただいた．厚く感謝申しあげる．

今回の展示作品は従来ほとんど発表されたことのない作品である．早見堯氏もテキストの末尾で，この時期の絵画は数点を除いては見たことがないと言われる．その意味では，初めての個展――ほとんど20年ぶりの――と言えよう．山田正亮の芸術に関心をお持ちの方は新鮮な驚きを持たれるのではないか，と私は推測する．

山田正亮の年譜を注意深く読むと，1968年の個展以来1978年の個展までブランクになっているのがわかる．10年の沈黙．この展覧会はこの沈黙の部分に初めて照明をあてるものである．

では何故この10年間のブランクがあったのであろうか？その理由はいろいろとあるであろう．前記の早見堯氏のテキスト末尾で述べられている意見もそのひとつである．また，そこに作家山田正亮の生き方が言外に示されている，とみることもできよう．私はと言えば，山田正亮が納得して発表する場がなかったという甚だ具体的な事情がひとつの大きな原因であると思う．作家がいかにすぐれた存在であっても，それを正当に評価し，共感し，支持する他者がいなければ，その作家は社会的な存在とはなり得ない，と私は思う．支持する他者のうちもっとも大きな部分を占めるのは画廊であり，そこに画廊の社会的存在理由がある，と私は思っている．いささか話が飛躍してきたが，私はこの「10年の沈黙」の持つ意味は美術関係者にとってそれぞれの受けとり方ができて，奥深いものがかくされているのを感ずるのである．

今回の展示作品は1960年代後期の幅の細い2色のストライプの時期が終わり，1970年代後半に現われてくる分割の時期に移行していくまでの期間に制作された作品である．すなわち，フォルムについては，ストライプの幅が太くなり，横のストライプに縦のストライプが加わり，さらに幅広のストライプは正方形へと移っていくのである．そして色彩については極めてデリケートで奥ふかく，洗練されたものになっていくのがわかる．

2色という極限的なギリギリの選択のなかで，作家が敢えて選んだ色彩，その相関関係と調和がもたらすインパクトは，見る側に，静かに伝わり，次第に至福の状態に導く．美しいとはこの様なものを言うのだ．この時期の作品はまさしく日本におけるミニマルアートの典型と言えよう．

最後に，山田正亮さんの益々のご健勝を心から祈るものである．

1989年5月13日

佐谷画廊

佐谷和彦